

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



緑の地球環境センターのマツ。カザンマツ（華山松）、ハクビショウ（白皮松）は寒さに弱いので覆いをかけてある。

Contents

- 年頭のごあいさつ P 2
- 津波被災地の白砂青松再生計画 P 4
- タイムマシンに乗った夏 P 6
- 春の黄土高原ワーキングツアーのご案内 P 7

2012.1

143

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

年頭のごあいさつ

20 周年、さらなる飛躍にむけて

前中 久行（緑の地球ネットワーク代表）

いろいろなことがあった 2011 年がゆき、新しい年を迎えました。地球とその上に存在するすべての生命にとって、無事平穏がつづき、緑が濃くなることを心から願います。

黄土高原現地において、昨年は激動の連続でした。大同市経済の拡大と都市改造の影響を大きくうけて、いくつかの拠点から退かざるをえませんでした。しかし、関係者の艱難辛苦の努力と機転と度胸によって新しい土地が確保されました。多くの方々のご支援をえて、新しく「緑の地球環境センター」

を建設中です。振り返るとまさに綱渡りでしたが、管理棟、井戸、苗圃など施設の骨格がほぼ完成し、結果的には災い転じて福となり、緑化のベース基地が更新されます。各地の緑化地すべてで成功しているわけではありませんが、順調に成長し、中には林や森といってもうそにならないところもあります。新規の緑化予定地も確保しなければならず困難な中にもうれしい仕事です。またいっぽうで、日本の国内活動の充実や多様化、組織的には会員数の確保、特に若い人々に参画いただくことなど

についても活動の芽が出始めています。

緑の地球ネットワークは、2012 年 1 月に創立 20 周年を迎えます。いままでの活動にご参画、ご支援いただいた国内外の方々と企業・組織に心より感謝します。20 周年の記念行事を国内外で行います。ご期待ください。

今後とも引き続いてのご参画とご支援をお願いします。みなさまに幸多きことをお祈りし、年頭のご挨拶とさせていただきます。

20 年の活動に祝賀と感謝を

武 春 珍（緑色地球ネットワーク大同事務所所長）

黄土高原における緑化協力活動の 20 周年を迎えることに、私はたいへん感動しています。この数日、私たちの活動の写真をみながら、自分たちの子どもが大きくなるのを見るようで、平静ではおられませんでした。

20 年前、高見邦雄さんがこの子どもに出生の機会を与え、その後この子の成長のために、尊敬する立花吉茂先生と、前中久行、遠田宏、小川眞、竹中隆、干場、太田、東川、会田、河本などたくさんの方のみなさんが、私たちと協力し、20 年間、奮闘してきたのです。この 20 年のあいだ、資金の不足、経験の不足、劣悪な自然環境、意思疎通の困難などを克服して、数々の失敗を耐え忍び、困難な局面を突破して、両国の国民が団結して大同の環境を改造し、まさに人びとを感動させる一幅の絵巻を描きあげてきたのです。

これまでに黄土高原での植樹造林は 5,500ha に達し、建設した防護林と小学校付属果樹園は延べ 200 余所に上ります。昨年から前中久行先生の計画により、重大な困難を克服して、緑の地球環境センターの基礎部分を完成しました。

私たちの活動は中日双方の政府の支持を受け、社会的にも広範な影響を与えています。この緑化協力活動は、全国のさまざまな団体が実施する環境協力力のなかでももっとも期間が長く、交流関係がもっとも深く、大きな成果をあげた活動の一つです。高見さんは中国政府の授与する国家友誼獎の榮譽に輝きました。

長年の実践が教えているように、大同における環境保護活動は歩きにくい、遠くて、困難な道のりであり、より多くの人が勇気を奮い起こし、より多く

の心血を注ぎ、持続的な努力をする必要があります。

私たちは今後も手を携え、黄土高原緑化のためのこの偉大な事業に身を投じ、私たちの共同の子どもが元気に成長していくよう努力したいと思います。

私は私たちの事務所を代表し、この機会を借りて、この 20 年間の風雨の過程を乗り越えてきたことに、熱烈な祝賀を表します。前中久行代表、そして創始者の高見邦雄さん、会員と友人、支持者のみなさんに、崇高なる敬意を表し、心から感謝いたします。

立花吉茂先生を偲ぶ会のご案内

昨年 9 月 20 日に他界された緑の地球ネットワークの前代表で名誉顧問の立花吉茂先生を偲ぶ会をひらきます。講演会、自然と親しむ会やワーキングツアーでごいっしょされた方、あるいは GEN の活動以外でも親交のあった方、いっしょに立花先生の思い出を語り、ありし日を偲ぶ機会にしたいと思います。

- 日時：2 月 16 日（木）18 時 30 分から
- 場所：大阪弥生会館（JR「大阪」駅、阪急・地下鉄「梅田」駅徒歩 5 分。大阪市北区芝田 2-4-53 tel. 06-6373-1841）
- 会費：5,000 円（会食いたします）
- 参加申込み：2 月 9 日までに GEN 事務所まで

報告 2011 秋の宇久須合宿報告

藤原 國雄 (GEN 世話人)



恒例となった宇久須合宿。これで4回目となりました。11月11日に国際ボランティア学生協会のメンバーと高見さんが宇久須宿舎に到着。天気はあいにくの雨模様でしたが、第一休耕田で炭焼き体験。その間、続々とメンバーが宇久須へ到着。夜は海鮮焼きの「カネジョウ」で結団式。翌12日は天気にも恵まれ、第一休耕田のヤーコンの茎葉を収穫し、カーネーション団地のピ

ニールハウスへ移動。トラック2台に山のようにあった茎葉を、エンジンカッターで細断し、青いビニールシートへ広げてゆく。終わったのが3時頃だったので間伐材の切断は中止。宿舎に戻り、待望の夕食。佐々木さんと藤嶋さんが丹精こめて作ってくれたイモ煮汁にお代わり続出、夜7時から防災センターで高見さんの「中国黄土高原緑化協力の20年」と久保田豊和氏の「宇久須とヤーコン」のプレゼン。終了後宿舎に移動し、スローライフの皆さんとの交流会。分校の先生や生徒さんも参加して大盛況。

最終日はGENの圃場のヤーコンとサツマイモ、そしてポアロと万次郎カボチャの収穫。その後クリスタルパークで行われ



ヤーコン葉の処理作業。

ている「ふるさと祭り」に参加。11時から磯焼けの海岸に移動し、無煙炭化器で流木を処理しながら焼き芋。2時頃、宿舎に戻り荷物をまとめ、途中で宅配便で収穫物を送り解散しました。

宇久須プロジェクトは来年も継続しておこないます。

野菜送ります！

GENの圃場で栽培したヤーコン（ペルーA）とサツマイモが大地に眠っています。

ヤーコンは血糖値や血圧の高い方、便通の悪い方に最適です。着払いで送りますので、ご希望がありましたら藤原 (kunio@mail.wbs.ne.jp) まで連絡してください。価格は評価額をGENまで寄付してください。

緑化協力の現状を報告

報告 GEN 報告会『中国黄土高原に育つ緑』

鶴田 惇 (大学生・GEN 会員)

'11年11月16日、ひと・まち交流館京都にて、GEN報告会『中国黄土高原に育つ緑』を開催しました。大原一晃さん、鶴田惇さんによるワーキングツアー体験発表につづき、前中久行代表が、大同での緑化協力について報告。39人の参加がありました。

昨年度春のツアーに参加させていただいた、京都大学3回生の鶴田です。今回は、何度もツアーに参加されている京都大学院生の大原さんとともに、前中先生の報告に先立ち、ツアー参加者としての視線で10分ほど発表させていただきました。前中先生はアカデミックにお話をなさるだろうと思っていましたので、こちらは具体的なエピソードを中心に、肩の力が抜けるような雰囲気です。ツアーの様子を話させていただきました。できれば笑いも取りたかったところですが…まだまだ修業不足ですね。

さて、本題の前中先生の報告では、砂漠と砂漠化の違いの話から始まり、

現地での木の植え方、炭堆肥・菌根菌利用の効果、GENのプロジェクトの最新情報など、幅広い話を気さくに話してくださいました。しっかり笑いも取っておられましたし…さすがです！その中で、実際に私も春のワーキングツアーで移植作業を行った、新拠点「緑の地球環境センター」の最新情報について少し触れておきます。みなさん、なんと、アンズがしっかり活着していました!!これには感動、そして安心しました。色々な苦難がある中、これからGENがどのように動いていくのか、自分はどのように関わっていけるのか。非常に楽しみです。

参加者
募集

ワンワールドフェス
ボランティア

2月4日(土)、5日(日)の2日間、大阪国際交流センターで開催されるワン・ワールド・フェスティバルに、今年もGENは出展します。NGO紹介ブースで、活動紹介をはじめ、絵はがきや切り絵などの販売をおこなう予定です。昨年は多くの人がブースを訪ねてくれて、交流の輪がひろがりました。

当日のボランティアを大募集しています。お手伝いいただける方、GEN事務所までお知らせください。

●2月4日(土) 10時～17時

2月5日(日) 10時～16時

(準備、片付けなどで時間が前後することがあります。可能な日、時間をお願いします)

●場所：大阪国際交流センター（地下鉄「谷町九丁目」駅、近鉄「大阪上本町」駅）

津波被災地の白砂青松再生計画

小川 眞（白砂青松再生の会代表・GEN 顧問）



昔の白砂青松

2011 年 3 月 11 日、マグニチュード 9 を超える地震が岩手県沖で発生し、それに伴う大津波で岩手県三陸沿岸から茨城県にかけて、太平洋岸の広い地域が想像を絶する災害に見舞われました。よもや、これほどの被害が出るとは思わず、3 月 12 日に愛知県美浜町で第 5 回「白砂青松再生の会」を開き、13 日には皆さんと一緒に海岸にマツを植え、タケ炭を焼きました。その朝福島第一原発の事故を耳にして、それ以後しばらくテレビから離れられなくなりました。というのも、海岸の様子と知り合いの消息が気になったからです。

若いころ訪れた陸前高田の「高田松原」と名取市の「閑上浜」は海と陸の高低差が小さく、以前から津波や高潮による災害が心配でした。そのため、地元からの要請もあって 2009 年からマツ林の管理方法や苗の植え方などの相談にのっていました。2010 年 10 月には「閑上浜」へ、2011 年 2 月 19、20 日には「高田松原」へ出かけて、ボランティアの皆さんに話をし、一緒に落ち葉か

きや炭を埋める作業をしたばかりでした。

こんな努力もむなしく、「高田松原」では樹齢 300 年を超えるクロマツやアカマツの老木から若木まで、7 万本がへし折られ、根こそぎ抜かれて流されました。「高田松原を守る会」でも会長の吉田正耕さんを始め 13 名の方が亡くなりました。一本だけ残った「希望の一本松」も 10 月には

すっかり葉を落として枯れました。地盤が 1.3 メートルも沈下したため、マツ林があったところが海になり、きれいだった砂浜が消えています。老木の根がむき出しになり、まるで手をつないで助け合っていたように見えて言葉を失いました。

40 年前に訪れた「閑上浜」は典型的な「白砂青松」で、延々と続く幅広い立派なマツ林でしたが、その後開発によって宅地や農地が変わってしまいました。それが今回の災害を大きくしたように思われます。陸前高田同様、海岸林の手入れを長い間法律で禁じていたので、落ち葉が厚くつもり、根が地表を這って深くはいらず、砂を止める力が弱くなっていました。そのため、数十年前に植えた若いクロマツはすべてなぎ倒され、まるで茶色の遺骸が並んでいるように見えました。ここでも江戸時代に植えられたマツは生き残り、その陰にあった建物を守ったといえます。

陸前高田にも名取にも人工の防波堤がありましたが、跡形もなくなり、何の役にも立ちませんでした。それどころか、防波堤で波が盛り上がり、滝のように流れ落ちたため、内側がえぐられてしまい、運河のようになっていきます。津波が引いた後も排水が進まず、未だにどちらも街や農地の跡が水浸しのままです。

私財をはたいて篤志家が植え、400 年もの間苦労して守ってきたマツ林でしたが、今度のよう

な大津波に襲われると、ひとたまりもありません。海岸林で津波を防ぐことはできませんが、波の力を抑えることはできるはずですが。陸前高田の場合は波高が 16 メートルに達しましたが、ねじ切られた老木を見ると、それでも波の力のある程度そぐのに役立ったように思われます。名取の場合は残っている木もあって、明らかに倒されながらも、マツ林が内陸を守ってくれたように見えました。

両方の地元の人たちによると、自然にできたマウンドの上にマツが生えていると、波を抑える効果が大いといえます。今、国土交通省では高い堤防を作る案を出していますが、林野庁はマウンドを作って木を植えようといっています。ぜひ地元の声を聴き、今回の災害を教訓として自然の力を借りる賢明な方策を立ててもらいたいと思います。

「稲むらの火」で有名な濱口梧陵さんが津波の後に作った防波堤が和歌山県広川町に残っています。これは土手の上にマツなどの木を植えたもので、今も立派に役立っています。自然の中に暮らし、自然の力を体得していた昔の人たちの知恵には頭が下がります。しかし、未だに反省もしないまま、人間が作った科学技術と経済を過信している人が多いのも困ったことです。

いうまでもなく、被災地の海岸林は長い間地域の人々に親しまれ、防災上も景観の上からも大切な存在でした。そのため、地元では消えた松原を惜しんで、ぜひ「白砂青松」を復活させたいという声が上がっています。まだ、具体的な復興プランすら見えてきませんが、その声にこたえたいと思って老躯に鞭打つことにしました。

7 月に閑上浜を訪れた時、茶色に枯れたマツの中に生きた若木が何本か残っていました。これは 5 年前に宮城県林業研究センターの人がショウロの菌根がついた苗を植えた場所でした。ショウロに助けられたクロマツは潮をかぶっても、芽も根も枯れずに生き生き



陸前高田。手をつないで踏ん張ったマツの根株。



と育つことができるのです。これでショウロが耐塩性を高めることが証明されたといえます。

一方、炭を植穴に入れてマツを植えると、ショウロが出てきます。さらに活着率が高くなってマツが健全に育ち、マツの材線虫病にも耐えることが知られています。おそらく、この方法をつかえば、津波の被災地でも海岸林再生が可能になると考えました。

そこで、「高田松原を守る会」や「ゆりりん会」、京都府緑化センターの伊藤武さん、GENの藤嶋茂さんや佐々木陽子さんなどと相談して、今この作業を長続きさせる方策を立てようとしています。地元産のマツを植えなければならないので、11月には松毬を集めて京都府緑化センターに送ってもらいました。ショウロつきの苗は伊藤さんたちボランティアグループの手で育てられます。この苗が出来上がれば、2年後から現地での植林が始まります。また、将来は地元で苗作りから取り組んでいただくため、この方法は出来上がり次第、被災地の団体や研究機関に手渡されていきます。

幸い、名古屋のセイエイ・エルサンテ・ホールディングスという医療介護機器の販売会社から社員の寄付による基金

提供があり、2年分の経費の都合はつきました。ちなみに、この会社の会長中沢さんは大のキノコ好きで、会社の理念の中に「相利共生」の概念を取り込んでくださいました。なお、所要経費は日本バイオ炭普及会の協力を得て、地元へ送られています。幸いなことに、このところ大勢の方々のご協力で「白砂青松再生」の輪が次第に広がり始めています。

ただし、苗を育てるのに最低二年、海岸に植えたマツが防災効果を発揮するのは数十年先のことになります。「白砂青松」が戻るには少なくとも百年かかります。しかも、植える場所は全国いたるところにあります。ですから、このマツを植えるという行いは、未来のために尽くす無償の奉仕にほかなりません。いくらお金をかけても、機械を駆使しても生き物はいうことを聞いてくれません。禅宗に「栽松の行」という修業があるそうですが、修行のひとつと思っただけで実行するしかありません。ご参加くださる方はその覚悟で長生きされるよう健康にご留意ください。

この活動を永続させるために、苗の里親制度を作り、育った苗



名取開上浜。生き残ったショウロつきのクロマツ。

を自分の手で植えようという案がでています。そのうち皆さんに呼びかけることになるかもしれませんが、その節はぜひよろしくお願い申し上げます。なお、「白砂青松再生の会」は2006年4月29日に私が一人で立ち上げた会で、現在会員数150名、会費無料、会則・役員会なし、責任も義務もありません。ただ、メールアドレスを教えてください、お便りと年一回持ち回りで開かれる集会の案内をお送りしています。なお、2012年3月の第6回集会の開催地は兵庫県新温泉町、浜坂です。

参加者募集

緑の地球ネットワーク
20周年記念シンポジウム

『地球環境と国際協力のために わたしたちにできること』

- 日時：2012年1月28日（土）13時30分～16時30分
 - 会場：東大弥生講堂・一条ホール（東京メトロ南北線「東大前」駅）
 - パネリスト：松井孝典さん（千葉工業大学惑星探査研究センター所長、東大名誉教授）／桜井尚武さん（日本大学教授、元日本森林学会会長）／高見邦雄さん（GEN事務局長）
 - コーディネーター：上田信さん（立教大学教授・GEN世話人）
- 終了後、同会場にて懇親会をもちます。会費5,000円。参加ご希望の方は1

月20日までにGEN事務所までお知らせください。

* * * * *

北京での20周年記念行事は日時・会場が決まりましたらお知らせいたします。

参加者募集

GREENなんでも勉強会

21世紀のエネルギーの主役は？

3.11以降、脱原発や自然エネルギー導入への声が高まっています。一方現実をみれば、日本はエネルギー供給の大部分を化石燃料でまかなっており、中でも石油は一次エネルギーの40%以上を占めています。今回は、長年石油

技術に携わってこられた美谷島克実さんにエネルギー問題について話していただきます。

質疑の時間を長めにとりました。ぜひご参加ください。

- 講師：美谷島克実さん（石油技術協会評議委員・元出光オイルアンドガス開発（株）技術担当副社長）
 - 日時：2月24日（金）18時30分～21時
 - 会場：大阪市立総合生涯学習センター 第2研修室（大阪駅前第2ビル6階）
 - 参加費：700円（学生300円）
 - 定員：60人
 - 申込み・問合せ：氏名・年齢・連絡先を前日までに電話・FAX・Eメールで、GEN事務所まで（当日参加も可）。
- ※勉強会の後、会場付近の店で懇親会を予定しています（会費3500円程度）。

タイムマシンに乗った夏

梅原 徹（兵庫県立大学大学院特任教授）

緑の地球環境センターの建設や南天門自然植物園の調査などに、毎年春と夏、日本から専門家が大同を訪れ、調査や実験、指導にあたっています。昨年夏も、8月16日～26日に8人、8月30日～9月7日に10人が参加し、いろいろな活動をおこないました。最初の団に参加した梅原徹さんに報告をお寄せいただきました。

タイムマシンにでも乗らないかぎり、過去の自然の正確な姿は知りようがない。残念ながら、タイムマシンはまだできていないから、過去を知るには、書きのこされた記録や、現在の自然条件から推定するほかはない。ところが、古い時代の自然の記録は少なく、またその精度ははかりがたい。とはいえ、すでに失われた自然の再生にあたって、手がかりなしでは進めようがない。そんなとき、目標にされてきたのが、あまり人手が加わらなかったと考えられる場所に現存する自然である。

日本、とくに西南日本の場合、自然林の復元モデルにされたのは、社寺の照葉樹林であった。神社林は聖域として利用が制限されてきた場所が多かったから、比較的良好な自然状態が保たれたり、回復しやすかったことはまちがいない。したがって、そこそこのレベルのモデルにはなりえた。

さて、大同周辺の場合はどうだろう。黄土高原はよくわからないが、降水量と温度条件から、少なくとも基盤山地に森林が発達していたことはまちがいない。過去の壮大な木造建築の材料が、すべて遠方から運ばれてきたとは考えにくいし、現に、奥地にはそこそこの森林が残されている。ただ、もともと森林が発達するぎりぎりの条件のうえ、歴史的に日本よりはるかに古い時代から継続されてきた自然からの収奪が、断片さえとどめないほど、もとの植生を破壊しつくしてしまったうえに、回復もまた遅いから、原型のモデルを探すのは日本ほど容易ではない。そのうえ今日でも、燃料や家畜の餌を得るための収奪は続いている。

おかげでというのも妙な話だが、大同周辺では、すでに日本では見られなくなった草原性の

植物そのものや、近縁な種類をふんだんに見ることができる。シオン、マツバニンジンなどがその代表である。彼らは過去の寒冷で乾燥した時期に大陸から日本に分布を広げたが、気候が温暖化した後は自然に消滅するはずだった。彼らの命脈を保ったのが、農地の肥料としての里山からの収奪である。収奪の結果、草原的環境が比較的近年まで持続し、草原性の植物は、温暖多雨な日本で生きのびることができた。その後、流通経済の発展や化学肥料の普及によって、急速に森林からの収奪はなくなり、里山は森林化、西南日本では常緑樹林化の道をたどりつつあるから、草原性植物のほとんどは、絶滅に瀕している。

2011年の夏、おそらく江戸時代中期から明治時代の日本にはふつうに見ることができたであろう里山、ほとんど草しか生えていないように見える山を、大同で見ることができた。まさしくタイムマシンに乗って時空を超えた気分である。山肌はあちこちで露出し、樹木は小さくいじけ、見た目はハゲ山に近い。本来の自然からすれば、劣化した姿なのだが、草原性の植物は質量ともに豊かだった。1960年代の後半、大阪でもかろうじて生き残っていた草原

性の植物を知っている私は、とても興奮して、心の中で、こんなことを思った。「緑化なんかしなくていいから、このままこの草原を保全したい！」

地域の苦勞を知らない、考えない、不遜な奴だと思われるかもしれない。しかし、今はふつうな、とるに足らない自然に、将来に向けての価値を見出すことも必要ではないかと思う。こうした議論を深める上で地域に必要なのが植物園である。植物園は英語では Botanical Garden、植物学園で、Plant Garden ではないことから明らかなように、本来は植物の研究施設で、観光施設ではない。そこでは地域の植物や植生が、基礎から応用面にいたるまで、科学的に研究されるべきである。砂漠化した地域の緑化を考える基礎を提供するのも、現在の姿を正確に記録するのも、植物園の重要な役割である。さいわい、太行山脈北部の南天門自然植物園には 86ha もの土地が確保されている。比較的近い距離にある人手も放牧も入らない山中には、落葉広葉樹を主とする自然林の断片が発見されたという。これは、きわめて恵まれた立地に植物園が設置されていることを意味する。ただ、南天門自然植物園はまだ立ち上げられてからの日が浅く、具体的



日本では絶滅危惧Ⅱ類とされているシオン、同ⅠA類とされているマツバニンジン、大阪では絶滅したホソバヒメトラノオに似た植物（左から）

な活動はこれから充実させねばならない。

今年、大同周辺は雨が多く、大地には緑が濃かった。それだけではなく、放牧の規制がすすみ、山からの収奪自体が減ったこともあいまって、植物園の山には近年、樹木が急に茂りはじめたらしい。土地の保全のためには好ましく、植生の回復過程を研究することは、遷移系列の推定に役立つから、それは望ましい変化でもある。しかし一方、樹木の繁茂は本来の植生への回復を示すものではあるものの、現在この地に優勢な草原の衰退を招来する。こうした変化は自然の利用が少なくなった土地では必然で、簡単には制御できないものだが、自然にまかせれば、現存する植物や景観の多様性が損なわれることもたしかである。日本の里山がたどってきた歴史を、中国の里山もまた、たどろうとしているのかもしれない。

その可否はさておき、植物園では、今を記録することも大事な仕事である。英米の大きな植物園、キュー・ガーデンやミズーリ植物園は、世界有数のハーバリウム、植物のさく葉（押し葉）標本収蔵庫を持っている。現存する植物を研究し、標本として保存することは、今をタイムカプセルにとじこめて後世に伝えることにつながり、これは植物園の大きな使命のひとつでもある。南天門自然植物園も熱心な現地スタッフにめぐまれ、すでに園内に自生する植物の標本づくりにとりくみはじめてい

る。しかし、標本づくりは奥が深い。いつ、何を、どのように採集すべきか、これが判断できるようになるには、長い経験を要する。よい標本とは何か、それは専門家が見たときに、作り手の意図が読みとれるものだろうと思う。ただ、標本で何を表現したかったかがすぐにわかる標本は、一朝一夕には作れない。

たとえば同じ種類でも、季節を違えて標本にすれば、その植物の生活史を表現することができる。例をあげよう。南天門自然植物園にもわずかに見られるブナ科のモンゴリナラやリョウトウナラは、花の時期にはまだ葉が出ていない。あらかじめマーキングしておき、春先に花の標本を作ったら、秋には同じ個体から果実のついた標本を作ろう。落葉後には、冬芽のついた枝の標本も作る。どんぐりが採れれば、苗畑に蒔いて発芽させ、実生の標本も作ろう。これでようやく、彼らの生活史を標本で表現できたことになる。リョウトウナラに比べ、モンゴリナラはかなり大きくならないと、花や果実をつけないようだ。それも標本で表現しておきたい。木の形状や立地を記したラベルがついていれば、花や果実がなくても、それは有用な標本となる。要は、作り手の意図が明瞭な標本がよい標本なのだ。

標本作りは採集から始まる。よく観察し、どれを採集すべきかを見極め、



南天門自然植物園の谷筋に再生しつつあるモンゴリナラ

生育環境など、必要な事項を記憶するか、メモをとる。採集した植物はすみやかに乾燥させ、最低限、産地、採集年月日、採集者を記したラベルをつける。ラベルがついて、押し葉ははじめて標本と呼べる。できあがった標本は防虫に留意して保存する。そうしてはじめて利用できる標本になる。

次は標本を利用してみる。標本は利用してはじめて、良し悪しがわかる。たとえば不明種の場合、同定しようにも、同定に必要な部位が標本に備わっていないければ、たちどころに作業は行きづまってしまう。標本は利用しないと、何が必要条件かがわからない。こうした経験を積みかさねることによって、はじめてよい標本が作られるようになる。その意味からは、南天門自然植物園のハーバリウム、標本収蔵庫はスタートラインに立ったばかりである。その発展を楽しみに、見守っていきたい。

参加者募集

2012 春の黄土高原ワーキングツアー

植樹の適期を迎える4月の大同で、村の人たちといっしょに木を植えませんか。

今回のメインは、南天門自然植物園。年々緑を濃くしている植物園ですが、回復しつつある森の姿を観察するには、葉が茂る前の春がもっとも適しています。地域の緑化拠点としての整備もはじまった植物園を体験してください。また、緑の地球環境センターもいよいよ充実。村での植樹・交流に加え、新しいステップに踏み出しつつある大同での緑化協力、目が離せません。

●日程：2012年4月7日（土）～13日（金）6泊7日

●訪問地：中国山西省大同市（北京経由）

●費用：16万円（国際航空運賃、中国国内の交通費／食費／宿泊費を含む。GEN年会費〈一般＝12,000円、学生＝3,000円〉、燃油特別付加運賃、空港使用料、旅券取得費用、個人でかける旅行保険料、個人行動時の費用は含まない）
※全日空利用 ※関西空港発着 ※羽田発着便（中国国際航空）利用の場合も費用は大きく変わりません。

●定員：35名程度

●最少催行人員：12名

●申込み期限：2月29日（定員に達し次第締め切ります）

●参加ご希望の方は、GEN事務所までご連絡ください。資料は、（株）マイチケットから発送します。

情報ひろば
いっしょなかたち

第15回六甲奨学基金のための
古本市

六甲奨学基金は、兵庫県下の留・就学生への奨学金や日本語ボランティア教室を支えています。古本市は、基金の募金活動の一環です。昨年度の売り上げは過去最高の4,408,822円でした。

- 受付期間：3月1日～31日まで（この期間以外は受け付けられません）
- 送付方法：直接持参または送料送り主負担で送付

【注意】

- ・汚れ・破れのひどいものは不可。
- ・辞書大歓迎。絵本、マンガ、洋書可。
- ・雑誌、教科書、参考書、コンピュータ解説書、文学全集、百科事典等は不可。
- ・CDも集めます（Video、TV番組を録画したDVDやコピーCDは不可）。
- ・紙袋も集めます。ボランティアも募集。
- ・お送りいただいた本は返せません。
- 送り先・問合せ先：（財）神戸学生青年センター古本市係（〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 tel. 078-851-2760 fax. 078-821-5878 e-mail : info@ksyc.jp http://ksyc.jp）

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

- ★六甲奨学基金のための第15回古本市
- 3月15日～5月15日まで毎日開催
単行本、文庫・新書、辞書、CDなど
100～300円／冊。

自然観察インストラクター
養成講座

- 基礎、応用、実践と段階をふんで『自然の感動を伝える』インストラクターの勉強をしませんか。
- 日程：4月7日～10月21日（全26回。詳細は下記HP参照）
 - 参加資格：18歳以上。身近な自然を守るために何かやりたいと考えている人。原則としてすべてのプログラムに参加できる人。
 - 参加費用：一般＝29,000円（教材費、保険料含む。宿泊研修時の宿泊費・食費等含まない）
 - 定員：25人（先着順）
 - 申込み方法：はがき・Eメールに氏名（ふりがな）、性別、生年月日、住所を記入し、下記まで。
 - 主催・問合せ・申込み：（社）大阪自然環境保全協会 自然観察インスト

ラクター養成講座係（〒530-0041 大阪市北区天神橋1-9-13 ハイム天神橋202号室 tel. 06-6242-8720 fax. 06-6881-8103 E-mail : inst@nature.or.jp http://www.nature.or.jp/training/instructor.html）

編集後記

新年が明けましたが、今年は「あけましておめでとう」と言うのにためらいを感じた方も多くいらしたのではないのでしょうか。東日本大震災の爪痕はいまだ生々しく、福島第一原発事故がどのように収束していくのか見当さえつきません。

ささやかな募金で細々と応援していたところに、小川顧問が被災地のマツ再生に乗り出されたと聞き、ようやく本紙に書いていただくことができました。黄土高原の緑化と同じく、こちらでも時間がかかる仕事です。育苗となると場所の手当が困難ですが、募金なり植樹に行くなりして参加していきたいと思います。

GENのリーフレットを新しくしました。宣伝にご利用ください。（東川）